

## ① 心豊かな市民生活

## 2 文化

横浜は文化施設の整備が遅れている、とよくいわれる。実際には、どうか。広島市を除く政令指定都市と比べてみよう。

幼児教育施設数・大学学生数・文化施設数・電話加入数・医師数の五項目を仮に「文化環境」としてとらえると、九都市の平均値を一〇〇とした場合、横浜は九都市のなかで最も低い七四・六（昭和五五年現在）。最高の京都が一五九であるから、その差がよくわかる。 「文化環境」のうち文化施設数に限ってみると、さらに低く五三・七。たしかに、施設面での横浜の立ち遅れははつきりしている。

その原因は、やはり横浜が他の大都市にはみられないような辛苦の経験をいくつか

重ねてきたためと考えられる。関東大震災、横浜大空襲、米軍接収、人口急増……。とりわけ、四三年から四年連続して年間一〇万人前後という記録を示した爆発的な人口増が、市財政を圧迫したことは特筆すべきことであろう。

## ■活発化する文化活動

一方、こうした状況のなかで、文化施設に対する市民の要望はどうか。市の調査によれば、文化施設に対する要望は五〇年六・六％、五三年一〇・一％、五五年一一・八％と次第に高まる傾向にある。横浜の文化施設水準、余暇時間の増大などがその要因であろう。

こうした意識の面だけでなく、文化活動も活発化してきた。県立音楽堂で毎月演奏会を行っている横浜交響楽団、スカイ劇場で毎月公演している横浜アマチュア演劇連盟加盟の各劇団、毎年秋に市民ギャラリーでハマ展を開催している横浜美術協会――音楽、美術、演劇、文芸、伝統芸能など、市が把握している団体だけでも、五〇〇近くある。このほか、多くの団体が独自



市民ギャラリー

にそれぞれの地域に根ざした文化活動を展開していることは、教育委員会へそのつど申請される名義後援件数の増加からもうかがえる。

## ■区図書館などに重点

では、このように文化活動が高まるなかで、市では、どのような施策を進めているのだろうか。

第一は文化施設の整備である。まず地区センターについては、昭和七五年度までに日常利用圏ごとに一館、整備する計画だが、



三の丸遺跡の発掘調査

この四年間ほどで一六館も完成。さらに中・緑区などで建設する考えである。

市民の要望が非常に強い区図書館はどうだろうか。区一館を目標に整備を進めているが、五五年に鶴見、金沢、港北図書館、五七年五月に保土ヶ谷図書館が完成。全部で七館となった。現在、瀬谷区で建設にとりかかっているほか、五八年度では一館分の用地取得を予定している。

地域的な文化施設だけでなく、全市的な施設の整備にも力を入れている。

五六年にオープンした横浜開港資料館、五九年中にオープンする予定の「こども科学館」、これから建設する美術館などがその例である。また、美術館の建設と美術品の収集、文化活動の振興などを目的に文化基金

を設置している。このほか、中区庁舎の移転を機に、その跡地を含めて市民ホールを五八年から建て替え始める。

第二は、文化事業の推進。文化講演会、市民大学講座、成人学校などを開催するとともに、音楽・演劇など芸術を鑑賞する機会も積極的に提供している。

第三は文化財の保存と継承である。称名寺境内、稲荷前古墳群、市ヶ尾横穴古墳群の保存・整備をはじめ、無形民俗文化財、埋蔵文化財の保護などを行う一方、文化財の調査・研究にも取り組んでいる。文化財は祖先が残した市民共有の財産、という考えからである。

これらのほか、区の特徴を生かした街づくりを進めるため、「区文化ゾーン形成基本調査」を行っている。

#### ■文化基本構想の策定へ

このように市の施設は広範囲なものとなっているわけだが、今後の課題もいくつかある。市民・有識者からなる「横浜市文化問題懇談会」の提言によれば、①事業内容の体系化、相互調整を図るための組織づく

り②文化行政の目標などを明らかにする「文化基本構想」の策定——などをその基本的課題としている。

市では現在、こうした提言をふまえ、「文化基本構想」の策定などに取り組んでいる。



こども科学館完成模型